

ISOM Japan NEWS Letter

17thICOM および台湾印象記

2014年11月1・2・3日の3日間、第17回国際東洋医学会学術大会（17thICOM）が台湾台北市の台大醫院国際會議センター（NTUH International Convention Center）にて開催されました。

この号では、学会に参加された先生方の、学会以外の風景をも交えての印象記を順次掲載していきます。

第17回ICOM感想記—言語について—

金沢医科大学腫瘍内科学 元雄 良治

今回私は Japanese Session の司会を務め、一般演題ではポスター発表を行いました。

ICOM で感じたことですが、国際学会なので英語が公式言語だと明記できればよいのですが、そう簡単ではないことがわかりました。開催国によって公式言語が変わる可能性があります。その意味では、次回の日本での開催では、堂々と日本語を中心にしてもよいかもしれません。

日本・台湾・韓国が中心のICOMでは、少なくとも処方名や基本的な用語（陰虚など）では漢字を併記することを学会のコンセンサスとしてはいかがでしょうか。そうでないと今回90歳代の元国立台湾大学内科教授のように「なぜ漢字を使わないのか。英語だけではさっぱりわからん」などという発言が出てきます。

しかし、今回の Japanese Session の発表や討論が全部日本語だったらどうだったでしょうか。まさに日本の学会がそのまま台湾に移動したことになります。日本語世代の台湾の人達には心地よいでしょうが、韓国や台湾からの参加者（とくに将来を担う若い世代）にとっては全く理解できないことでしょう。

私は Japanese Session の前に、違う会場で発表・司会・討論がすべて中国語で行われていた場面に出くわしましたが、これでは日本や韓国からの参加者には内容を理解することは難しいと感じました。Japanese Session では韓国の先生が英語で質問してくれたのですが、そのときはやはり英語でやってよかったと思いました。すべて英語で通して頂いた演者の先生方に心より感謝致します。

それともう一点は、日本人が処方名や基本的用語を使うときに、日本語をローマ字表記したあと、申し訳なさそうにたどたどしい中国語に直して発表する姿は何とも情けなかったです。これは国際会議で日本人がよくやることですが、「私は英語が下手なので、申し訳ありません」と謝罪からスタートすることです。こんなに謝罪から始める演者は日本人以外あり得ません。世界にはもっと癖のある英語でも堂々と発表している演者がいます。内容的には日本人の発表内容は緻密で、素晴らしいです。

「伝統医学は中国医学が中心」と考える人ほど中国語で処方名を表現できないことにコンプレックスを感じているようです。ICOM ではもっと堂々と日本語のローマ字表記（日本薬局方で採用されている法令です）のみで通してよいと思います。台湾（あるいは広く中国語圏）の人に理解してほしいのなら漢字（日本で使っているもの）を併記すればよいでしょう。

今回、ポスターで台湾からの発表に shosaikoto とローマ字表記してあるのを見て驚きました。やはり日本の取り組みを評価している人達がいることを改めて認識しました。

日本における伝統医学の歩みに自信を持ち、日本の医療制度の良さ、統合医療として世界に誇れる姿をもっとアピールすればよいと思います。日本の現代医療における伝統医学の姿を世界に発信しましょう！



座長をつとめる元雄先生



台湾高速鉄道を使っての高雄（Gaoxiong）への小旅行

～ICOM2014に参加後の国立中山大学訪問～

千葉大学大学院医学研究院和漢診療学 並木隆雄

私たちは舌診のための舌撮影システムの開発に携わっている。今回の国際東洋医学会（ICOM2014）に参加し、日本の漢方の魅力や長所の紹介のセッションの担当とともに、台湾国内での舌撮影システムの開発の視察を兼ねていた。舌撮影システムの開発は ICOM の講演の中でも紹介されていたが、台湾では 3 つのグループが行っていること。

今回はその 1 つのグループの舌撮影システム装置の開発担当を担っている蔣 依吾教授（Prof. Jim Y Chiang）の訪問をするため、高雄の国立中山大学の工学部に伺った。蔣先生には全く面識がなかったが、論文に書いてあるアドレスに、施設見学をメールで不躰に連絡を取りアポイントを取った。蔣先生は大変親切なことに我々の訪問を受け入れてくれただけでなく、

ICOM 閉幕後の 11 月 4 日の早朝鉄道の台北駅に向かう。ここからローカル線と台湾の誇る台湾高速鉄道（高鐵）が出発する。7 時半発の左営（高雄）行きに乗車した。列車は日本の高鐵の N700 系を基本に使用しているので、ほとんど変わらない。1 つだけ違うのは、入り口付近の片側の 2 席くらいのスペースに荷物置き場があることである。荷物のある旅行者には便利なので、日本もあるとよいと感じた（日本は連結部に荷物置き場があり、荷物に目が届かない不安がある）。

さて列車は一路南に向かった。高雄には最速の列車で台北から約 1 時間半で到着する。ルートはおおむね町はずれを通過しているので、景色はよく見ないと日本と変わらない田園風景である。車内で訪問先の蔣先生の共同研究者の書いた論文を見たりしているとあっという間に高雄の町の高鐵終点の駅の左営駅に着く（9 時過ぎ）。ここは、台湾国鉄や地下鉄で街中に繋がっている。将来街中まで高鐵はつながるとのことであった。

駅に降りると少し蒸し暑く感じる。台北では 11 月は朝夕にはやや肌寒くなることがあったが、高雄は北回帰線を越えた南にある都市だけあって南国の気候である。気温は 25-6 度である。訪問先の蔣先生が駅で待っていてくれた。駅の 4 階のパーキングから、大学に向かって走り出した。

蔣先生が言うには高雄は約 280 万人だそうで大阪市に匹敵する大きな都市である。立体道路がしばらく続き、その高さから南国にありそうなカラフルなお寺の仏像が見えた。

高雄は気温だけでなく町自体の作りも台北とは少し異なり南国的だ。少しリゾートに来たような雰囲気がある。建物は変わっていた町の作りは、日本人の町割りだと証先生が運転してくれながら説明してくれた。

さて、町の南外れの山向うの海外沿い国立中山大学がある。山向うであるので、歩行者専用のトンネルがあった。我々の自家用車は、山の南側を迂回する感じで西側に回り込んだ。そこに行くと、台湾海峡のまばゆいばかりの海が広がっていた。短い距離の海をまたぐと小さな島が見え、風光明媚な光景が広がった。ちょっとした観光地だ（写真左、左矢久保・右並木）。

実は、蒋介石の別荘の一つが大学内にあり、そんな場所なのである。そこで、時間をもらい記念写真を撮る。そのあと、大学の門を通過して、大学構内に向かうのであるが、工学部の建物の中は、節電で真っ暗であった。人もなく、大学の外の明るさとは全く異なっている。蔣先生が開発した舌の撮影装置の説明を受ける（右写真）。



詳細は省略するがポータブルでアタッシュケース1つに収まるサイズである。病棟などへも容易に持参できる点が魅力的である。その解析ソフトはかなり完成度が高いと感じた。彼の英語はかなりわかりやすく感じた。彼は博士号を取るためにシカゴの大学に5年間留学していたので大変英語が堪能である。彼の学生時代は、台湾は景気もよく留学する者が多かったのだと言っていた。

その後、海岸の横に立つ大学の中のレストランで中華料理を堪能した。御多分に漏れず、そのレストランは、外注されて委託されているのだという。その二階に会議室もあり、会合ができるとのことだ。ぜひ、次回はそこで会合をしようと言っていた。

時間はあっという間に経ち、我々はもう台北に戻らないといけない時刻となってしまいました。お名残り惜しいのですが、仕事できたことでもあり4時間弱の滞在時間でした。

ふたたび13時の高鐵に乗り15時に台北に着きました(17時の東京行き飛行機に乗るため)。今回は半日の滞在であったが、高鐵のおかげで、台湾の南まで簡単に行ける時代になったのです。台湾の高鐵は日本と同じで、遅れることはめったにないとのこと。皆さんもぜひ、次回の¥ICOMなどで台湾を訪れる時はこの高鐵を使って、南へのショートトリップを計画してはどうでしょうか。日帰りも可能です。



漢方薬店の集まる迪化街探訪

日本大学医学部内科学系統合和漢医薬学分野 矢久保 修嗣

アジアの伝統医学のひとつとして、我が国には漢方医学がある。このルーツは古代中国に発している。この古代中国の医学が、アジアに広がり現在では我が国では漢方医学、韓国では韓医学、中国では中医学となっている。これらの医学は、それぞれ固有の気候風土、生活習慣等によりそれぞれの地域で独自の発展を遂げてきた。

これらアジアの伝統医学のなかで、共通なのは生薬を用いる治療である。我が国であれば漢方薬である。この原料となるのが生薬である。アジアの国々では、街中に生薬の間屋街があることが多い。我々、漢方医はアジアの街を訪れた際には、必ずこれらの間屋街を見学しに行く。その際には、たびたび他のグループと遭遇する。

台湾の台北では、これが迪化街である。今回は千葉大学・並木先生に連れられて迪化街へ。迪化街を北から南へ歩いていくと、カメラを店に向ける数名の日本人グループを発見。

室賀先生、頼先生、松岡先生などの漢方医グループに遭遇した。この街の生薬問屋では、所狭しと店先に生薬が山積みとなっている。店内にはいると人參はもちろんのこと、超高級品からお手軽品まで陳列してある。冬虫夏草、鹿角、沈香などまである。この高級な生薬の横には、からすみ、乾燥したなまこ、フカヒレ、北海道産昆布まで。医食同源とはこういうことか、を感じさせる。漢方薬の原料の生薬も乾燥させた商品。こう考えると、生薬も乾物のひとつともいるのか、などと思いを巡らす。



店から一步、道路に出るとこれがやたら煙い。喫煙者がすごく多い。最近の日本では、こんなにたくさんの喫煙者を見ることはない。

この国は、たばこに関してはずごく寛容である。医食同源でも、これは憂慮すべき状況だ。

さすがに台湾高速鉄道（台湾新幹線）の車両は全席禁煙であったが・・・



第 17 回国際東洋医学会学術大会印象記

吉富復陽堂医院 吉富 誠

私が台北で開催される国際東洋医学会に参加するのは今回が 3 回目でした。今回も前回 2007 年の 12 回大会と同じく台大医院国際会議中心で開催されました。台北駅からのアクセスも良く、設備も整った会場でした。

今回は海外で開催された ICOM の中では、これまで以上に日本からの参加者が多く、演題も多かったため日本の存在を示すことができた学会でした。JAPANESE Session も開催され 5 演題の発表がありました。台湾の先生方も熱心に参加していただいていた。

JAPANESE Session で日本語が堪能な老齢の台湾人の先生が「処方名をローマ字読みで発表されたらどんな処方なのかわかりません。処方名には漢字を併記してください」と発言なさいました。私はなるほどおっしゃるとおりであると感じ、終了後その先生にお詫びして次回よりご指摘のとおりにしたいとお話いたしました。台大医学部病院長までお勤めになった高名な先生であるとのことでした。



吉富先生が、先生の師であられたソヌ・キ先生の 40 周年に際して受賞された顕彰牌を受け取ったときの写真

台湾の漢方薬学界の重鎮である顔焜熒先生とお会いできたのも今回の収穫でした。戦後日本の漢方復興期に、特に薬系の漢方に多大な影響を与えた先生です。「漢方を勉強する仲間として皆さんいつまでも仲良くお付き合いしましょう」というメッセージを送られました。

12 回大会の時にも訪れた台大学友会館 2 階の江浙料理のレストラン「蘇杭餐廳」へ今回も行きました。上品でヘルシーな味でランチタイムを満喫しました。お薦めのレストランです。

台湾の中医医院を訪れて、実際の診療を見学したいと、事前に交渉していましたが、残念ながらお互いのスケジュールが合わずに今回は実現しませんでした。次回台湾で開催される時は是非実現したいと思います。

以上簡単ですが、17 回大会の印象記とさせていただきます。

ISOM Japan ニュースレター 2014 No. 2

発行日 2014 年 11 月 28 日

編集者 ニュースレター編集委員会

発行者 安井廣迪

発行所 株式会社ジーエー企画

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-7

巖松堂ビル 10F

Email ga-takahashi@lake.ocn.ne.jp

ウェブサイト <http://isomjpn.umin.jp/>

国際東洋医学会日本支部

ISOM Japan

東京都千代田区神田神保町 1-7 巖松堂ビル 10F

株式会社ジーエー企画内

TEL. 03-5283-5006

FAX. 03-5283-5416